まえがき　「よりどころ」を求めて

僭越にも私自身のファミリーヒストリーを書きたい、遺したいと思うようになってから随分時間が経つ。

前著『もう一つの衣服、ホームウエア――家で着るアパレル史』（みすず書房）では、アパレルの中でもナイトウエアやラウンジウエア、ルームウエアといわれる分野、家の中で着る衣服の変遷に焦点を当てた。その分野をあえて「ホームウエア」としたのは、私自身のファミリーヒストリー執筆の構想が既にあったからである。

「ホーム（home）」は「居場所」であり、「よりどころ」「帰るべきところ」である。我が家の玄関外に敷かれたマットは、外から帰ってくる時には“home”、反対に、家から出かける時には“away”と読

めるようにデザインされたもので、私はちょっと気にいっている。あなたにとっての「ホーム」は？と問えば、家、家族、宗教、コミュニティと、人によってさまざまであろう。

それにしても、無名の人間のファミリーヒストリーに興味をもっていただけるだろうか。常にその危惧を持ちながら、それでも書きたい、書かなければならない、伝えたいと思い続けてまとめたのが、この本である。

子供のころから家や親戚の話はよく耳にする環境にあったから、もともとファミリーヒストリーには馴染みがあった。だが、真剣に向き合うようになったのは二〇一五年以降、両親をあの世に送ってからのことである。

古いものを整理する中で、我が家にたくさん残された写真や資料を見る機会が増えた。また、親戚との交流が増えるにつれて家系相関図も頭に刷り込まれ、次第に多くの人の顔とその関係が一致するようになっていった。明治時代、大正時代のものも私にとっては非常に身近に感じられ、古い写真の中の人々も、私の中ではいきいきとした生身の人間に感じられるようになったのだ。

以前は耳を素通りしていたことも、そういえば母が、祖母が、そんな話をしていたなと、あれやこれや思い出し、いろいろなことがつながるようになったというわけだ。複雑な親戚関係であるが、祖母の時代はもちろんのこと、母が晩年に至るまで同世代の親戚と密な付き合いをしていたおかげであ

る。

母はものを書きとめることが好きで、非常に筆まめであった。九十歳の最期まで頭脳はしっかりしていて、ガン末期にあっても、どうか（文字を書く）右手だけは麻痺しませんようにと、祈っていたほどである。

私がファミリーヒストリーを書くことを予測していたのか、期待していたのか、主に七十歳代以降、自分で少しずつ書きまとめたノートをはじめ、母は私に託すように、多くの記録を残してくれた。そういう母の思いの底に流れていたのは、娘たちが「根無し草」にならないようにというものだったといっていい。

さらに、先述の前著『もう一つの衣服、ホームウエア――家で着るアパレル史』を上梓した時、同級生の一人が、「もっとお祖母やお母様のことを書いていただきたい」と言ってくれたことも、大きな励ましになった。

こういう些細な「個」の歴史というものは、誰かが記録しなければ、それ以上に少しでも多くの人に知っていただかなければ、そのうちに消えていくものである。

これこそ「私に課せられた役割」ではないか――。そう思うようになったのは、家の歴史そのものが母や祖母にとっての生きる「よりどころ」であったからである。それは私自身のアイデンティティ

にもつながるものであり、残された人生をどう生きるか、まさに私自身の「よりどころ」を探す旅でもあるのだ。

単なる史実としてのファミリーヒストリーではなく、私から見た一族の歴史を書き進めてみようと思う。この中には、時代と共に変化してきた日本の女性の歴史も反映されているはずだ。「個」を「普遍化」することこそ、私のライフワークであることを再認識している。

最後までおつきあいいただけるとうれしい。